

地域史料研究会・福岡

研究会報

第 11 号 (通巻 第 141 号) 2014・12

とある小さな博物館施設の取り組み

有田町歴史民俗資料館 尾崎 葉子

な展示をしています。

全国的には昭和四五年度から国庫補助を受けて公立歴史民俗資料館が建設され、ちよつと古い資料ではありますが、平成二年度までに都道府県立が一二館、市町村立が四四七館建設されました。佐賀県では県立や各市町の博物館施設によって佐賀県博物館協会が組織されていますが、その内、「歴史民俗資料館」と名の付く施設は一〇施設あります。これらの設置目的は「地域の特色を示す民俗文化財や地域の歴史の流れを示す遺物・文書等の歴史資料を収集・保存し、これらを調査研究し、展示等を通じて地域住民に公開することによって、それらを活用していくための拠点となる施設⁽¹⁾」と位置付けられています。

元々の町の主幹産業であった農業の歴史、民俗の資料を当時の西有田郷土史研究会のメンバーが主体となって収集し、収蔵展示しています。東館では主幹産業である窯業を主体とし、江戸時代から始まった磁器の歴史や焼き物作りの道具類などを中心に収集展示しています。

さらに、昭和五八年に東館へ付設された有田焼参考館では、合併後現在は六六か所確認されている古窯跡などの遺跡から出土した陶片などを調査研究し、時代の変遷を追えるよう

筆者が勤務する有田町歴史民俗資料館は、施設面積が約六五〇㎡という小さな博物館で、博物館法に則らない、博物館類似施設です。平成一八年に旧有田町と旧西有田町が合併し、新たな有田町が誕生しましたが、旧町時代の昭和五三年にそれぞれ開館した西館・東館があり、いずれもすでに三五年が経過しています。

現在、この資料館は西館・東館として存続していますが、課題も山積しています。西館は



有田町歴史民俗資料館東館

しかしながら、昨今の博物館をとりまく環境は大変厳しく、特に歴史民俗系博物館が経済不況等を理由に閉館・統廃合などが相次いでいることも事実です。現に、二つの資料館を持つ有田町の場合も、旧西有田町の建物は合併以前からすでに

閉館状態が続き、現在も人的配置もできないまま、常時閉館した状態で、希望者があった場合に担当者が出向き、開館するという対応をせざるを得ない状況です。そのような中で、存在意義を認めてもらう努力も私どもに課せられているのです

が、如何せん、予算や人員不足などの問題で解決策は見いだせていません。また、一昨年「全国歴史民俗系博物館協議会」が江戸東京博物館を会場にして立ちあげられました。これは日本博物館協会の科学系、美術系、動物園・水族館などの館が、それぞれ館種別組織を持っている

のに対して、歴史民俗系だけが全国的組織がないことから、佐倉市にある国立歴史民俗博物館が全国の資料館などに呼びかけて組織化されたものです。この発足式で国立歴史民俗博物館の平川南館長は「東北地方の大震災を機に、地域の歴史・文化の発信源が歴史・民俗系博物館であり、歴史・文化がそれぞれの地域社会の基盤であるという理念とその実践を、一つ一つの博物館が推進すべき時が来た」ということを力説されていきました。

これまでの取り組み

当館は有田町文化財保護審議会会長であった蒲原権氏から一〇一点の古伊万里(蒲原コレクション)が有田町へ寄贈されたことが契機となり、これらを展示する施設として設計建



泉山磁石場

設されました。建設場所を決めるにあたっては、有田焼創業の原点ともいえる原料採掘場であった泉山磁石場に隣接する現在地が選ばれました。

また、有田焼創業三五〇年(昭和四十一年)事業の一環として、『有田町史』全十巻の編集発行が始まったことに併せて、その事務局も担い、編纂のための資料収集や研究活動もかなり活発に行いました。主となっ



有田町歴史民俗資料館西館

として個人的に多久通いを始め、現在に至っています。

開館から二年後の昭和五五年に、同じ町内に県立の九州陶磁文化館が開館し、その常設展示の目玉として蒲原コレクションが移管され、その後は本来の歴史民俗資料の調査研究及び収集展示が本来の職務となりました。それ

て編纂事業を担当された故宮田幸太郎先生と共に多久に残る有田焼関連資料の調査のために当時、西溪公園内にあった多久市立図書館を訪れたことがきっかけとなり、その後、「多久古文書の村」で古文書学校を始められた時から生徒の一員

れに加え、前述の町史編纂も主要な業務となりました。また、同じ敷地内に昭和五八年に有田焼参考館が、同じく平成五年には埋蔵文化財センターが増設され、文化財課の拠点としての職務も行うようになりました。さらに、前述のよう

に平成一八年には旧有田町と旧西有田町とが合併し、有田町歴史民俗資料館と、同年に開館した旧西有田町歴史民俗資料館が、それぞれ西館・東館として存続しています。しかしながら兼務が増え職域は広がっても、人的な配置は最小限の職員数です。ただ、町役場そのものが職員減を図っている中で、人口二万人弱の町単位で文化財課を有する自治体はそう多くはなく、多久で貴重な資料・文化財を守るために孤軍奮闘されていた細川章さんの姿を間近で見えてきた者にとつて、それでも有田は恵まれていると思

収蔵資料

っています。
収蔵資料に関しては前述のように、西館は農業を主体とした民具、東館は窯業関連の民具、

文書などです。両館は開館以来、寄贈もしくは寄託という形で資料受け入れを行っており、これらは平成一九年度に導入した収蔵品管理システムでデータベース化しているところで、現在、西館八三六件、東館七九〇六件を登録しています。行政文書や新しく寄贈された資料などは、今後作業を継続していく予定です。

また、今年度の企画展でも約二〇〇〇枚の有田に関する古写真をデータ化しましたが、平成一〇年の企画展の折に収集した古写真は、当時まだスクリーンなどの器械もなく、カメラで複写したものをカード化し所蔵しているのが、今後それらも含めてデータ化を進める予定です。

さらに、パテペビーの九・五ミリフィルムや一六ミリで撮



昨年度の企画展「アジアが初めて出会った有田焼」

影された昭和初期から三〇年代にかけての有田周辺を撮影したフィルムも保存し、企画展などで活用しています。

館の活動

・展示活動

常設展のほか、毎年一回、秋に企画展を開催しています。年に一回とはいえ、それなりに経

費もかかるので、町単

独では予算も掛けづ

らく、今までも芸術文

化振興基金や他の助

成を受けながら開催

してきました。また、

事前の調査研究や準

備に時間も費用もか

かりますが、そういう

面に対する助成・補助

はほとんどないのが

現状です。しかし、企

画展というのは、日頃

の成果を町民にお知

らせる機会でもあり、今後も

出来得る限り継続していきたく

と思っています。

昨年度は「アジアが初めて出

会った有田焼―蒲生コレクション

を中心にして」を開催しまし

た。これは平成二四年～二五年

にかけて、東京都在住のコレク

ター蒲生慎一郎氏から寄贈さ

れた有田焼八九点(主として東

南アジアで買い求められたも

の)を中心に、有田町内の窯跡

出土品、海外輸出港の長崎、あ

るいはフィリピン・セブシテイ

のスペイン人社会の需要が反

映された地区での出土品など

をもとに、江戸時代の有田焼が

アジアをはじめ海外にどのよ

うに運ばれて行ったかを検証

する企画展でした。

また、今年度は一〇月～一一

月にかけて「なつかしの有田

Part II」を開催しました。これ

は平成一〇年に開催した「なつ

かしの有田」の第

二弾でもあり、ま

た、平成一八年に

旧有田町と旧西

有田町が合併し

て新有田町にな

ったものの、未だ

というか、一体化している感じ

が見えないということもあり、

新しい有田町としての歴史を

振り返る企画でもありました。

会場も二か所を設定し、第一会

場、第二会場と会期を分けて約

一〇〇〇枚の古写真と、昭和二

〇年代～四〇年代に撮影され

た陶工の作陶風景や浮立など

をDVDにして放映・展示しま

したが、町内外から多くの方々

に来館いただき、好評の内に終

えることができました。

当館では常設展は入館料を

いただいておりますが、企画展は



東館周辺の紅葉



応援団による「歴史の川ざらい」の準備

より多くの町民の方々に足を運んでいただきたいという思いもあって無料にしています。さらには、当館のある敷地は白磁ヶ丘公園の一角ですが、ここには昭和三〇年代に、戦争による国土荒廃から復活させるための植樹が行われていて、それ

らの樹木、特にモミジなどが今まさに盛りとなつて見事な紅葉を見ることが出来ます。それを目当てにした町内外からの来館者も増えてきました。期間中にはそのライトアップや夜間開館も行っています。

・学習活動

当館では昭和六三年から一般町民を対象とした古文書教室を開催しています。現在は初級・中級の二クラスを、毎月それぞれ一回ずつ実施しています。この教室の場所の提供や講師謝金は有田町公民館で負担し、テキスト製作や教室の運営を当館が行うことで今に続いていますが、「元気の源です」と当初から二六

年の間、ずっと続けている受講生もいます。テキストは当館の所蔵資料や佐賀県立図書館所蔵の文書で有田に関する資料を取り上げています。

受講生を対象として、年に一回、各地の博物館や図書館などに出向く研修旅行を開催していますが、これもまた受講生には大変好評で、毎回先着順で受付し、やむを得ずお断りすることも多々あります。

また、子どもたちを対象として夏休みを中心に実施しているのは「歴史の川ざらい」と「町屋の模型作り教室」です。前者は今年で三回目と取り組んで日も浅いのですが、有田の町中を流れる川底に、江戸時代からの陶片が堆積しており、それを見つけ、その場で学芸員が制作された年代や元々の形などを答えるという形で進めています。

す。残念ながら、それらは貴重な文化財でもあるので、子どもたちは持ち帰ることはできませんが、夏休み中には当館から詳しい情報などを添えてその成果を子どもたちに伝えることで、興味を深めてもらう手立てとしています。

また、後者は今年で一四回目の教室です。当町の内山地区は国の重要伝統的建造物群の選定を受けていて、江戸期から昭和初期にかけての伝統的な建物が残っています。その模型を作ることで、子どもたちがふるさとに誇りを持つてもらおうことを目的としています。こちらも、講師は当館学芸員が担当しています。模型の作成にはスチレンボードという発泡スチロールの両面に紙を張った厚さ五ミリほどの紙板を使い、それに縮小した図面を張りつけ、

線に沿ってカッターで切つていく作業があります。最近の子どもたちは学校でもカッターを使う機会がないようで、教室ではまずカッターの持ち方、使

い方の練習から始めます。切り抜いた部位を組み立てて、ひとつの町屋の模型を完成させていくのですが、一〇種類ほどあ

る各時代の代表的な町屋や洋館を組み合わせて、各人それぞれの町並みが完成します。毎年二日間かけて作業を行っていますが、参加してくれる子どもたちはその間、殆どおしゃべりもなく、熱心に取り組んでいきます。これらは夏休み中に完成させて、それぞれの学校に宿題のひとつとして提出してもらっているようで、毎年定員をオーバーするほど好評です。

冬になると「町屋で昔話を聞く会」を開催していますが、こ

れもまた、有田町公民館との共催で実施しています。対象者は子どもたちで、伝統的な町屋の一軒をお借りして、そこではお話をボランティアの方に有田の伝説「黒髪山の大蛇退治」の紙芝居や昔話を語っていただいています。

・研究普及活動

当館では年に四回、『季刊皿山』という館報を編集発行し、町内全戸に配布しています。ただかだか四頁の簡易な館報ではありますが、編集も自前ですることので印刷の費用を抑え、各号八四〇〇部を町の広報に組み込んで各家庭に届けています。

この館報は仕事を進める中で知り得た史実や調査の成果などを、町民と共有するための情報発信のひとつと位置付けています。平成二五年一二月には

一〇〇号になりましたが、その折には頁数を増やし、町内外の関係者に玉稿をいただき発行しました。

また、毎年一回開催している協議会で、委員の方から再要望されてきたのが、もっと情報発信を、ということであり、それを受けて平成二四年三月から職員手づくりのホームページを開設しています。開設したからには頻繁に更新しないと意味がない、ということで、職員が交代で「泉山日録」というブログを設けてネット社会にも対応しているところです。そこに館報のバックナンバーも掲載しています。

また、研究の成果として、これまで皿山シリーズの『皿山なぜなぜ』『おんなの有田皿山さんぼ史』『皿山写真館』『有田皿山遠景』などを編集・発行し

ました。他にも『有田町歴史民俗資料館研究紀要』を一二号まで発行してきましたが、こちらは今後の継続が課題でもあります。

・ありたれきみん応援団の発足

これらの事業は館長と学芸員、文化財課職員（他に伝建事業や埋蔵文化財調査を持ちつつ）の四名で行っていますが、正直なところ、それぞれ手一杯の状態でもあります。そこで、平成二二年から三か年にわたって「一五〇年前の有田皿山歩こう隊」活動を、これまた花王コミュニティミュージアム・プログラムの助成を受けて町民の方々と一緒に取り組み、その参加者を中心に平成二五年に「ありたれきみん応援団」を立ち上げていただきました。現在一四名のメンバーによって、

職員だけでは不足している各事業の多くを補っていただいています。

例えば、企画展に関しては常設展示の撤去から企画展の展示作業、また、前述の各種学習活動の応援など、昨年だけでもその活動は四五回、延べにするると二五〇人の人的応援をいただき、当館のような人的にも予算的にも小さな館にとつては大きな力となって支えていただいているところです。

ただ、一方的に応援いただくだけでなく、当館もそれに応えなければということ、今年度からは毎月一回、応援団のメンバーを対象に「れきみん学習会」を開催しています。その内容は「なぜ初代金ヶ江三兵衛のお墓は二か所あるのか」、「酒井田柿右衛門家墓地内になぜ金ヶ江三兵衛のお墓が?」、「陶器

市は今年で一一一回つて本当?」など、団員の皆さんが興味を持っていただけるよう、また今まであまり知られていない史実なども織り交ぜて講義を続けています。

一月には九州国立博物館と九州歴史資料館を研修先として、二館のボランティアの皆さまとの交流を行い、応援団としての力量アップを図っていただいているところでもあります。それらを蓄積していただき、いつの日か、応援団自身企画した展覧会もできればと夢を膨らませています。

有田町歴史民俗資料館の課題

以上が、日本の片隅にある小さな小さな博物館が地域の歴史や文化財の保護のため行っている、日頃の活動の一端です。博物館施設である以上、来館

者の数(年間四〇〇〇人弱)も評価の一つとされることは免れないところではあります。ただ、当館とは比較にならない入館者数を誇る九州国立博物館の三輪館長も、将来の博物館の在り様として定量評価だけでなく、定性評価も求めていきたいと述べていらつしやいます(②)、数としては見えてこない部分、例えば町内外からの有田焼の歴史や文化などのレファレンス対応や町内外へ向けての情報発信など多々あることを、町民にもまた町当局にも理解してもらえよう努力することも忘れてはなりませんし、大きな課題でもあると肝に銘じているところです。

- (1) 文部科学省『我が国の文教施策』平成元年度、第二部、第八章、第五節、二(四) 歴史民俗資料館。
- (2) 「新春座談会 九州国立博物館開館一〇年、そしてこれから」『西日本文化』No.四七二、一三三ページ。

有田町歴史民俗資料館 東館

〒844-0001
佐賀県西松浦郡有田町泉山一丁目4番1号

電話 : 0955-43-2567
Fax : 0955-43-4185
<http://rekishi.town.arita.saga.jp/>

開館時間 9:00~16:30
休館日 年末年始(展示替えのため臨時休館あり)

交通 JR佐世保線 上有田駅下車 徒歩 15分
JR佐世保線 有田駅下車 車で 10分
西九州自動車道 波佐見・有田インターより 15分



【研究会からのお知らせ】

第一五回懇話会

二〇一四年九月二七日一四時から福岡市中央区天神一丁目の久留米大学福岡サテライトにおいて、九名が参加して第一五回懇話会を開催しました。

草野 真樹 氏

明治期における企業家・

商人データベース構築の試み

— 企業勃興期の担い手を把握するための模索 —

第一六回懇話会

二〇一四年十一月二九日一四時から福岡市中央区天神一丁目の久留米大学福岡サテライトにおいて、一三名が参加して第一六回懇話会を開催しました。

竹下 耕一 氏

長野 暹 氏

「ロイク王立鉄製大砲製造所における鑄造書」の佐賀藩翻訳書に関する分析

— 「電子書籍・電子ノート」による説明 —

懇話会の開催と

報告者の募集について

今年度最後の懇話会(第一七回)を年明けの二月一四日(土)に久留米大学福岡サテライトで開催する予定です。ご参加ください。また、次年度以降の懇話会の報告者を募集しています。ご希望の方は事務局にご連絡ください。なお、報告資料の印刷等お手伝いが必要な場合も、遠慮なく事務局にご相談ください。
(jimukyoku@chikishi.com)

当会誌への投稿について

当研究会が発行しているこの『研究会報』の原稿を随時募集しています。

研究会の目的に沿ったものであれば原則として内容・形式を問いませんが、編集委員会から若干の修正をお願いする場合がありますのでご承知おきください。刊行はウェブ上での公開で

すが、ダウンロードして印刷することも可能です。印刷したものが必要な場合は事務局にご相談ください。なお、印刷したものは、懇話会など研究会の会合の際に配付していますのでご利用ください。

原稿は、手書きでも結構ですが、できる限りワープロ・ソフトのファイルやテキストファイルなど電子データで提出していただくようお願いしています。本格的な印刷ではないため、使用文字等に制約がある場合があります。図版・写真等の掲載も可能です。提出していただく原稿は横書きでも結構です。字数は制限していませんが、八千字以上になる場合にはあらかじめご相談ください。

投稿をご希望の方は編集委員会へご連絡ください。
(henshu@chikishi.com)

会員情報の確認について

二〇一四年度総会の決定に基づき、会員の皆様の会員情報について、事務局から連絡し、確認していただく予定でしたが、作業が遅れております。今年度三月末までに実施する予定です。

確認のための連絡はEメール(メールを利用されない方には郵便またはFAX)でお送りする予定です。お手数をかけますがご協力をお願いいたします。

研究会報 第一一号

(県史だより 通巻第一四一号)

平成二六年二月一六日発行

編集・発行

地域史料研究会・福岡

jimukyoku@chikishi.com

<http://www.chikishi.com>